10 月号

Civis Magazine PERIPLUS

No.12

“対話を通して政治参加の選択肢を広げる”

対話の大切さを知ってもらいたい。
そう語るのは、学生団体 Aile(エール)の代表を務める、武藤幸さん(20)だ。

武藤さんは高校生の時に全国高校生未来会議という高校生が政治や社会問題について意見を交わす集まりに参加し、対話の大切さに気付いたことが学生団体 Aile(エール)を設立する原点になったと語る。

「それまで私は、特に政治的な考えについて自分と真逆の意見を持っている人と話す機会があんまり無かったんです。だから自分の意見が一番という訳ではないんですけど、心のどこかで、『自分と違う意見の人とは分かり合えないんだ』と勝手に思っていました。でも、この全国高校生未来会議に参加して、”自分の意見と違う政治的意見を持った相手を尊重しながら聴いたうえで、更に自分の意見を相手に伝えることができる”ことが ”本当の意味の対話” なんだと気づいて、衝撃ですごい感動したんです。そこで全国の中学生、高校生にも私と同じように、違う意見を尊重する対話の大切さを知ってもらいたいと思ったんですけど、その際に “政治” をテーマにした方が意見の違いが明確に出ると考え、高校 3 年生の時に政治について対話することを目的に Aile を設立しました。」

武藤 幸さん(20 歳)

2000 年生まれ。
高校 3 年生の時に「中高生に主権者意識を持たせると共に、「対話」の重要性を体感してもらう為の活動をしたいという想いから学生団体 Aile(エール)を設立。代表として毎年夏に中高生による模擬国会開催に尽力。

代表として Aile を運営する際に心掛けていることについて武藤さんは、

「Aile のコンセプトは “中高生と政治をより身近に” なのですが、二つのことを心掛けていますね。一つ目は “対話の大切さを知ってもらう”ことです。二つ目は、”模擬国会を通じて、参加者自身が国会議員になったつもりで政策立案や提言を行う“ ことです。これは、自分自身が国会議員になったつもりで議論をすることによって、税金の使われ方などを知ることができ、政治を身近に感じるきっかけにして欲しいからです。」と語る。

「私が政治に関心を持ったのは家庭の環境が大きいですね。私の両親が政治に関心があって、その影響で私

政治家娘YouTuberみこちゃんねる

みこ の徒然日記

～菅内閣デジタル庁設置について～

最近私と私の周りの若者が熱視線を注いでいるのが「デジタル庁創設」だ。マイナンバーカード、運転免許証、健康保険証などのデジタル化が実現するかもしれない。さすれば持ち歩き無し、コピー、紛失の防止、その他あらゆる作業の効率化などに繋がる。

もちろんセキュリティの問題などは多くあるが、それはすでにデジタル化を取り入れている他国を参考にしつつ、日本 におけるデジタル庁での人事は民間人のエキスパートを積極的に起用していけば懸念材料は限りなく少なくなっていくだろう。

私が切望しているのは「印鑑でないと認められない文化を変えていく」ことだ。ある日、代理人として税務署に行った時、窓口まで来てようやく書類の１箇所だけ印鑑を押さなければならなかったということに気が付いた。印鑑でなくサインでも大丈夫な箇所があったが１箇所だけなぜか印鑑でなければならないという事実に衝撃を受け、また駅から離れた税務署に行かねばならないのかと大きく落胆したことは今でも覚えている。窓口にいた職員の方もバツの悪そうな顔をしつつ「印鑑でないといけないんです」の一点張り。

私にとっても職員さんにとっても幸せな状況とはとても言えない。そんな状況を打破する可能性があるのがデジタル庁だ。

一刻も早い実現を願ってやまない。

みこの徒然日記は今月号で最終回となります

が小さい頃からニュースを見ながら政治についての話をしていて、身近で当たり前な存在でしたね。もちろん小学生の頃とかは、どの党がどんな政策をやっているとかは理解できていなかったと思いますが、今の総理大臣は誰かとか、”政治”に対するイメージは持っていました。」とご自身が政治に興味を持つきっかけについて話をしてくれた武藤さんは現状の課題について次のように語る。

「Aile が実施している模擬国会は中高生をメインにしているのですが、参加してくれるのはある程度政治に興味を既に持っている方やアクティブさを持っている方が多かったですね。なので、参加者の幅を広げるというのが課題だと思います。今考えているのは、現在の会場が衆議院会館や参議院会館といった東京ベースなので、やっぱり東京の学生しかなかなか来ないんです。だから各地で模擬市議会といったもっと小さいサイズで行政や学校と協力して地元について考えるという形で開催することですね。ただ今年は新型コロナの影響で今まで、毎年夏に開催していたんですが開催できず、冬もどうなるかわからないのでできるとすれば来年ですかね。」

中高生と政治の関係について武藤さんは、

「私がいいなと思うのは学校のホームルームの前とかに雑談としてクラスメイトと政治の話が自然と話題になるような関係ですね。その為にはディベートの時間を学校の授業として設けるなどして、まずは自分の意見を相手に伝えて、相手の意見を聴くという環境を整えることが遠回りだとは思いますけど必要なことだと思います。」と語る。

最後に武藤さんにとって“政治とは”を伺った。

「私にとって政治は、”なくてはならない大切なもの”ですね。理由としては、やっぱり政治で決まったことは自分たちの生活にどんな形であれ影響が及ぶものですし、もし政治が何も決めないと私たちの日常生活を含めた社会が成り立たなくなるからですかね。それに私自身、小さい頃からニュースとかを通じて政治を身近に感じてきたので、私自身にとってもなくてはならない大切なもの、ですね。ただ、一つ思うのは学校教育で政治に参加することを義務みたいにしちゃうのは良くないかなと思っています。こんなに政治に参加させたい感じの団体を作っていてこういうことを言うのも変なんですけど、”政治に参加しない”という意思も大事だと思っています。ただ、”よくわからない”から参加しないというのは良くないと思います。”政治とはどういうものか”を知ったうえで、自分の意志で“参加する”、”参加しない”を決めることが大切だと思います。」

参加しない。

「確かに、その考え方も立派な政治参加の選択肢の一つであり、選択肢から除外されるのはおかしい。」

武藤さんのお話を伺って感じた率直な感想だ。我々を含めた主権者教育や若者の政治参加の促進を掲げている団体はどうしても何とかして主権者の意識を持ってもらい、投票率を向上させようと様々な活動をしている。しかし、10 代、20 代の投票率は 3 割台を抜け出せていない。投票率を向上させることや政治参加促進することにのみ目がいっていないだろうか。

もちろん、若者世代の政治参加が促進され投票率が向上することは重要であるし、その為の活動は決して無意味なことではないと信じる。だが、敢えて ”政治に参加しない” という選択も選択肢の中に含まれ、尊重されるべきものであるということを認識し、忘れてはいけないのではないだろうか？

そして時折立ち止まり、振り返り、何が本当に必要とされているのかを考え続けてなくていけないのではないだろうか？

3